

実況中継「土曜講座」

第3号 2023年6月10日

市川学園 6月3日の土曜講座 於 國枝記念国際ホール

中村 桂子 先生

「生命科学で“人間とはなにか”を考えるには —科学はこのままでよいのだろうか—」

JT 生命誌研究館名誉館長

中村 桂子 先生のご紹介

- 1959年3月 東京大学理学部化学科卒
- 1964年3月 東京大学大学院生物化学修了
- 1964年4月 国立予防衛生研究所研究員
- 1964年10月 東京大学 理学博士
- 1971年4月 三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室長
- 1981年5月 同・人間自然研究部長
- 1989年4月 早稲田大学人間科学部教授
- 1991年 日本たばこ産業企画部顧問
- 1993年4月 JT 生命誌研究館副館長
- 1995年 東京大学先端科学技術研究センター客員教授
- 1996年 大阪大学連携大学院教授
- 2002年4月 JT 生命誌研究館館長 (2006年まで)
- 2003年6月 関西電力株式会社取締役 (2006年まで)
- 2006年6月 関西電力株式会社監査役 (2007年まで)



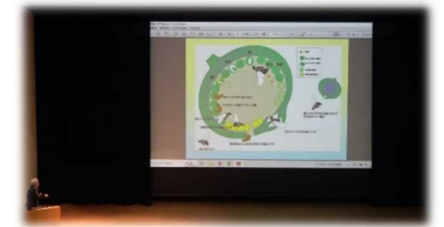
主な講義内容の紹介

第2回土曜講座は、生命科学の第一人者である中村桂子先生より、「生命科学で“人間とはなにか”を考えるには—科学はこのままでよいのだろうか—」という題でご講演をいただきました。

中村先生は、「生命科学」とは人間に役立つために自然を「上から目線」で支配する立場ではない、「中から目線」で視野を広げることが必要であることを、わかりやすい具体例と共に、熱く語ってくださいました。また「生きる力」の必要性が叫ばれて久しいこの頃ですが、「生命科学」を通じて、人と人がつながりあうことこそが「本質」であるということ、さらに、次代を担う私たちは、「良い面も、悪い面も自分のこととして考えること」が大切であることなど、長年にわたり研究の最先端にいらした方ならではの視点で、私たちのこれからの生き方に対しても大きなヒントをいただくことができました。

受講レポートから

- ・ 今の私たちからすると DNA や遺伝に対する考え方は当たり前と思っていることであったが、中村先生が学生の時代にはそうではなかったことに驚いた。「愛づる」を大事にしたい。(中1女子)
- ・ 「生きものとして」の人間の生き方、という深い考え方を知ることができた。「扇形」の図の中、つながりの中に自分がいるという言葉、生き物として生きるということを大事にしようと思った。本当に良い経験になった。(中2女子)
- ・ 生命科学を通じていろいろな視点で生命を考えることはすばらしいと思いました。僕も日々いろいろな勉強をしている時、分野同士のつながりがわかるととてもおもしろいと感じます。(中3男子)
- ・ 科学は歴代の学者達の努力の積み重ねであり、私たちが学んできた知識は当たり前で得られるモノではないということに気づかされた。人間を特別なものとして考えることよりも、生きものとしての人間を考え、自然と共生することが大切だと感じた。(高1女子)



- ・ 自分の専門だけで考え、知らない見方や分野を排除するのではなく、一緒に全体を見るということは、科学分野だけでなく、他の人種などとの関わりにもつながる考え方だと思う。現代では「環境問題を解決しよう」としているが、人間が自然を支配し、自然を壊さないようにするのではなく、「人も生き物の中のたった一種である」という感覚を大切にしていきたい。(高1男子)

- ・ 私たち人間は、人間が一番偉い、人間が生物を支配している、と考えがちだと思います。私も家の犬と一緒に遊んだりするし、話を聞いてもらったりするし、庭のアジサイに「大きくなったね」と毎朝話しかけています。私たち人間は生き物の一員であるのだと思いました。(高2女子)
- ・ 先生が最初におっしゃっていた「人間が自然を支配するのはどうなのか」というご意見に共感しました。人間は自然に支えられて生きているのに、自然の上にいるような認識は正当なのか、と思いました。子どもの時は、多くの人々は自然とふれあいながら成長し、大人になるにつれて自然を意識しなくなるのも、人間と自然を区別しているからなのかと思いました。また、先生の研究は、研究者だけではなく、研究室とは別の所でも実施されていることがすてきだと思いました。私は文系なので、科学に直接触れる機会がありませんが、理科には興味があるので、科学者と協力し、一緒に研究について考えられるのは、魅力的で多様性の時代に合っていると思いました。(高3女子)
- ・ 科学の道をずっと歩んでいっしょからこそ、現代の科学に疑問を持っていると最初におっしゃっていたのがとても印象的でした。科学は日々の暮らしをより豊かにしたり、人間の寿命を延ばしたり、人間が神の視点で接する学問のイメージがあったので、生命科学で「生き物としての人間」として見ると言うことは目からウロコでした。科学の進歩によって自然破壊が進んでしまった面もある故に、生命科学で自然そして生き物のつながりの中で人間はどのような存在なのかしっかりと知る必要があることがわかりました。コンクリートの割れ目に咲く野花に足を止めてじっくり見たいと思いました。(高3女子)

